
リアルライフ

黒木露火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リアルライフ

【Nコード】

N2513F

【作者名】

黒木露火

【あらすじ】

【空想科学祭参加作品】幽霊が出る、データが残っていれば死んだあとも《リアルワールド》の中で生きてける などという不吉な噂が^{リアルワールド}電脳空間にはあった。友人の死の謎を解くために、主人公は死んだはずの少女を電脳空間に追い求める。（全4話）

R e a l 1 (前書き)

本作品はフィクションです。 実在する団体・人物とは一切関係ありません。

Real 1

ログインしたユーザーの、閉じられているはずの瞳に最初に映るのは、リアルワールドへようこそ という青い文字。

他になにもない一面の白い世界の中、水面のように静かに揺れて空中に浮かぶその文字に触れると、ふいに街の雑踏が聞こえてくる。瞼を開けたユーザーは、電話ボックスを模したログイン・ポイントの中にいることに気づく。

ガラスの向こうの街並みと雑踏は、限りなく現実に近い夢
限
りなく夢に近い現実。

それが、電腦空間 リアルワールド だった。

佐山浩司は大学を卒業し、 リアルワールド の運営会社に入社した。

リアルワールド は十年前の設立以来、順調に業績を伸ばしていた。近年の伸び率は特に著しい。

しかし、そこには一つの不吉な噂があった。

「ねえ、佐山くん、 リアルワールド に幽霊がでるってホントなの？」

焼き鳥を片手にした牛島の発言に、佐山は怪訝な顔をした。

大学を卒業して初めての飲み会には、同じゼミでも特に仲のよかった六人が集まった。

新人研修後、やっと現場に出してもらるようになり、少し落ち着いた夏のことだった。久々に見るメンバーは皆、以前より少しだけ引き締まった顔をしている。

「俺は見たことないし、そんな話聞いたこともないよ。大体、うちの会社、二年前にできたばっかの新社屋だよ？ 伝説できるには早すぎるって」

佐山は笑い飛ばしてジョッキをあおる。

「だーれが会社つつたよ。中だよ中。ゲームの中」

佐山の後頭部を軽く叩いて、左の席に着いたのは園田だった。O
A機器の営業部に配属されたというだけあって、どんなときでも威
勢がいい。

「ああ、でも俺も聞いたことあるよ、その噂」

右隣の、特に仲のよかった本村が冷酒を口に運びながら言った。

住所が近いこともあって、今でもたまに食事をしたりするものの、
そんな話をしたことはない。研修で疲れきっている佐山にはわざと
その話をしなかったのであろう。気遣いが今更ながら身に染みた。

「そんなに有名なんだ。でも リアルワールド はバーチャルリア
リティなんだよ？ そんな大きなバグは考えられないし、意図的に
プログラミングしたのでなければ幽霊なんてありえないね」

Oと1で完全にコントロールされた世界に、そんな不確定なもの
が存在する余裕はない。

「幽霊じゃないけど、うちの学校でも噂が出てるわ。 リアルワー
ルド で死んだはずの人間を見たって」

木之下は高校の教師になった。一緒に赴任した同じ新任の指導力
のなさを、さつきまで嘆いていた。

「一昨年、自殺した女の子がいたらしいんだけど、その子の姿を去
年美術の授業中に リアルワールド の中で見たって生徒がいて、
登校拒否になってるのよ」

リアルワールド の中では、データ化された歴史建造物を自由
に歩くことができ、美術品や工芸品にも気兼ねなく触れることもで
きる。そのため、美術や歴史、地理の授業に使われる機会も増えて
きていた。

「そんな噂が広がると困るよ。せっかく教育向けのオブジェクトも
揃ってきたっていうのに」

「根拠がないのがはつきりしたらこっちもそのつもりで対応できる
から、何かあったら教えてよ。でも、私は国語科だからあんまり関

係ないけどね」

木之下は舌を出した。まじめかと思えば案外お気楽なところは、社会人になっただくらいでは変わらないようだ。

「俺も会社で聞いてみるよ。なんかわかったら、連絡するから」

そんなやりとりを思い出したのは、飲み会から数日経ったある日のことだった。

佐山の仕事場は、カスタマーサービス部。いわゆるサポセンである。

研修を終えて以来、三か月はまずメール、次の三か月は電話での対応に追われる毎日だ。

気がつくと、電話で謝りながら実際に頭も下げるようになっていた。客には見えるはずもないのにと、苦笑いすることもある。

ストレスは溜まったが、この経験がやがて実際のリアルワールドの中でのサポート業務へと繋がると思うと、それなりのやりがいも感じられるものであった。

その日も佐山はエアコンのきいた室内で、冷や汗という名の汗を多量にかきながら客との対応に追われていた。

「はい。リアルワールド カスタマーサポート担当の佐山でございます。ご用件を承ります」

最初の頃は舌を噛みそうだった部署と自分の氏名も、今では家の電話をとるときもすっかり名乗ってしまいそうなくらい馴染んでしまった。

「……あのう」

若い女の子の声だった。若いというより幼いくらいの。それっきり黙ってしまった。

電話からは雑音が聞こえないので、家の電話なのだろう。中学生か高校生か。

「はい。どのようなご用件でしょうか？」

明るく、しかし急かさないように、少しゆっくりと対応する。

「ええと……」

言いにくそうにしている。

「あのう……プレイヤーが死んだ後も リアルワールド では生きていけるって、ほんとですか？」

「は？」

思わず佐山は返答に詰まった。そんな突拍子もない質問に当たったのは初めてだった。

とりあえず検索をかけようとして、キーワードをなんとかしたものか悩んでしまう。そして思い出したのが先日の飲み会の際の話だった。

『幽霊』とPCに入力してエンターキーを押す。候補に上がったのは二十一件の過去の問い合わせ。その概要を見ると似たような質問も入っていて、全て「処理：秋山課長」となっている。

「少々お待ち下さい」

保留にして、タイピングよくレポート作成中だった隣のブースの山部に小声で聞いてみる。

「山部さん、『プレイヤーが死んだ後、リアルワールド では生きていけるのか？』っていう問い合わせ入ってるんですけど、これは課長送りでいいんですよね？」

ベテラン契約社員の山部は三十代の女性で、このフロアでは一番古く、応対もしっかりしている。その山部が肯いたので課長の秋山を呼び出す。同時に聞き取った質問内容のデータも送る。

「他の詳しい者に代わりますので、もう少しお待ちください」

断わりを入れて再保留にするとほぼ同時に、秋山が引き継いだことをPC画面で確認した。ほっと安堵の息をつく。

すると隣の山部がキーボードを叩きながらぼそぼそ語りかけてくるのが聞こえた。

「最近、変な質問多くなってるみたいなのよね。そろそろ警戒対象に入と思う、その手の質問」

「ありがとうございます」

小声で礼を言っP Cに目をやると、さっき検索をかけたデータ

がそのまま表示されている。

これまでの報告書を見ても、どの対応も一言でいうなら「そのような事実はありません」だった。実際の言い方はもつと違うのだろうが、秋山のような上の人間が出てくるのなら面倒な何かがあるのだろう。それが何かは気にはなつたが、調べてもこれ以上の何かわかるわけでもない。

木之下には「やっぱり事実無根だった」と家に帰ってからメールすることにして、佐山は業務に戻ることにした。

九月になり、やっと残暑も抜けてきた土曜日のこと。

佐山が八時までの遅番を終えて、携帯をチェックするとメールが四件届いていた。

メールをチェックしてみる。

「久しぶり。元気か？」

「今日、仕事？」

「食事でもないか？」

「連絡をくれ」

差出人はすべて本村。市役所に勤務する本村は土曜日は休みのはずだ。サポセンに配置になってからは変則勤務になって休みが合わないため、近況報告の軽いメールだけでしばらく会っていないかった。「なんか急用でもあったかな？」

少し考えて、メールではなく電話を掛けてみることにした。呼び出し音の後、留守番電話に変わる。

「あ、俺だけど、なんか用だった？　今、仕事終わって明日は休みなんで、いつでも連絡ください」

メッセージを残して切つたが、本村からの返事が来たのは結局翌日の午後になってからだつた。

待ち合わせの近場のファミレスに行くと、彼は窓際の席で眠り込んでいた。起こそうか起こすまいか迷いながら、向かいの席に座ると同時に彼は目を覚ました。

「どうした？」

「先月、園田なんかと飲んだときに、変な話があったじゃないか、リアルワールドのことで。あれ、どうなった？」

妙なことを聞くと思いながらも、木之下に事実無根だったというメールを送った顛末を語った。本村は神妙な顔で聞いていたが、目の下の隈が、普段から規則正しい生活を送っていたはずの彼らしくない。

「それで？ リアルワールドがどうかしたのか？」

注文したコーヒーが来ても、なかなか話だそうとしない本村を佐山は促す。

「あれ、本当だった」

「あれって？」

「リアルワールドでは死んだ人間が生きているっていう話」

Real 2

「はあ？」

突拍子もない話に佐山は驚きを隠せない。しかし本村は気にせず続ける。

「昨日、たまたまリアルステーションの前を通りかかったとき、店頭のデモ画面で見たんだ。高校のときに死んだはずのミホが交差点を歩いていくのを」

リアルステーションは リアルワールド の直営施設で、契約手続きの他、データ作製も行う。

ビジターと呼ばれるビギナー向けデータ作製には、前面と背面の写真が二枚あればよい。あとは登録画面で身長と体型を選択するだけで、ユーザー本人というよりインターネットで使われるアバターの感覚に近い。

インターフェイスもゴーグルと触覚再生用のグラブだけという手軽で簡単なものだ。学校の授業などでもよく使われている。

もう一つのレジデントと呼ばれる一般ユーザー登録するには、リアルステーションに出向く必要がある。

3D写真で全身像を撮影、解析し、そこからデータを起こしている。もちろん多少の修正は効くようになっていたのだが、あまり極端なものは感覚の再生を犠牲にするので、勧められてはいない。

個人別にできるだけリアルな感覚が再生できるように、ヘッドセットの調整も行われている。

「で？」

「そのままステーションに入って、契約してユーザー登録も済ませた」

疲れた顔の本村が満足げに答える。

「それはそれはご契約まことにありがとうございます」

佐山は思わず丁寧に頭を下げてしまった。

リアルワールド の備品はすべてレンタルになっていて、持ち帰れば契約したその日からプレイできるようになっている。

持ち帰ってから、寝ずにプレイしていたに違いない。

「でもお前、ゲームはほとんどやってなかったじゃないか。何のために リアルワールド なんかにやってるんだ？ なんかって社員の俺が言うセリフじゃないけどさ。その子に似た子を探すためか？ どうせ他人の空似なんじゃないのか？」

コーヒーが冷めているのに気がついた佐山は、一口含んでその苦さに顔をしかめた。

「制服が、同じだったんだよ」

かすかに震える声で本村が続ける。

「高一の夏から彼女が死ぬまでの二年間、つき合ってたんだ。見間違えるはずがないじゃないか」

俯いているのは涙をこらえているからというのは考えすぎだろうか。

「自殺したんだ、彼女。死ぬ前に俺のところに電話をかけてきた。

『私、生きていてもいいのかな』って。俺……なんて言ったらいいかわからなくて黙ってた。そしたら翌日死んだんだ。手首を切って今でもあの声、憶えてるよ」

女子に比較的人気があったにも関わらず、大学時代、本村は誰ともつきあおうとはしなかった。グループでの行動は避ける気配がなかったから、女性嫌いというわけでもないと思っていたが、そんなことがあったとは。

重すぎる話に、佐山は冷めたコーヒーをまた口にするしかなかった。

「どう見ても彼女だったよ。ミホだった。あれは」

「……で、本村。お前、その子を リアルワールド の中で見つけてどうするんだ？ 女性ユーザー、特に十八歳以下の子にしつこく迫るとアカウント即削除されるんだぞ」

「わかってるよ」

「それに リアルワールド は所詮バーチャルだ。これも社員の俺が言うことじゃないけど、現実じゃないんだよ」

「わかってるよ。ただ、どうしても彼女に会いたいただけなんだ。もう一度」

テーブルの上にうずくまるようにして嗚咽する友人を正視できず、佐山は窓の外に目をやった。

しばらくは毎日電話やメールで本村の様子を確認していた佐山だったが、十月に入り、部署が変わって忙しくなるとそれも週に一、二回に減っていった。

もともとゲームなんてまるでやってなかった男である。

普通のゲームのようにイベントの連続をこなしていくものならともかく、一種日常生活の延長のような リアルワールド にはすぐに飽きてしまっただろうという予測もあった。

しかし、アパートの隣家のキンモクセイが咲いた日、香りに起こされるように目覚めた佐山が目にしたのは本村からの最後のメールだった。

「見つけた。やっぱり彼女だ」

履歴は午前三時すぎ。

平日のことだから、役所の仕事には差障りがないはずがない。

「あのバカ。まだ諦めてなかったのか」

イライラしながら電話を入れる。まだ早朝だから家は出ていないはずなのに、応答はない。留守電にもならない。

不吉な予感がしないでもなかったが、まさかという気持ちが勝った。

セールスか何かだろうと無視するつもりだったが、今まで携帯にそんな電話はかかってきたことがない。妙に気になって、人のいない休憩室で伝言を再生してみる。

録音されていたのはまるで聞き覚えのない男の声で、本村が死んだということ、自分は警察官で亡くなった時の状況を知りたいので

電話が欲しいということ。そして、連絡先の電話番号だった。

「嘘だ……悪い冗談だろう？」

本村の携帯に電話を入れて聞こえたきたのは、「この電話は電源が入っていないか、電波の届かない場所にありますが」というおなじみのアナウンスだった。

信じられなくてまたかけてみる。「この電話は」で反射的に電話を切った。

電話をしなければと、伝言を何度聞いても電話番号をメモできない。佐山はそれで自分がどうしようもなく動揺していることに気がついた。

やつのことで書きとめた番号に電話を入れてみると、やはり警察だった。

まず、解剖の結果、本村の死因が衰弱死だったことが告げられた。

「亡くなったのは今朝の四時くらいそうですね」

「どうして……」

ひよつとしてあのメールが届いてすぐに気が付いていたら、本村を助けられたのではないかと一瞬思った。激しい後悔だった。

本村も恋人を亡くしたとき、きつと同じような思いがあったに違いない。その冥い遺産を引き継いでしまったような気がした。

言葉に詰まった佐山に、武中と名乗った刑事は気の毒そうに続けた。

「リアルワールド ってご存知ですか？ 飯も食わんとゲームをやつとったんですなあ。勤務先の役所のほうはここ一週間ばかり無断欠勤しとったそうです」

「そんなまさか。あいつは無断欠勤なんてするようなやつじゃないです。それに リアルワールド には六時間の時間制限がついてるんですよ。その後は二時間のインターバルを置かなければ再ログインできないはずですよ」

「それがですねえ。ヤミソフトというんですかねえ、リミットブレーカーちゅうのを使ってまして、うちのそついうのに詳しいのが履

歴を確認したら、九十時間くらいずっとぶっ続けてゲームやっとたらしいです」

「リミットブレーカー、ですか」

「ほら昔、中国の若者がゲームのやりすぎで死んだことがあったでしょう。あれがやっぱり九十時間近かったそうで、何事もやりすぎはいかんということでしょうなあ。で、本村さんの最後のメールの内容ですが、『見つけた。やっぱり彼女だ』って何のことかわかりになりますか？」

「高校のときにつき合ってた彼女だそうです。自殺した」

「はあ」

刑事は訳がわからないと言いたげに気の抜けた声を出した。

「その女の子に似た子を リアルワールド の中で見たからって、探してみたいなんです。もう リアルワールド なんか止めて、元気で普通に仕事してるとばかり、思ってたのに……」

何も知らなかった悔しさがつぶやきになった。

「事件性は…… やほりないようですねえ」

「ご愁傷様ですという言葉を残して、刑事の電話は切れた。

まるで合わせてくれたようにその日は休日だったので、佐山は通夜ではなく本葬に出席することにした。

本村の実家は車で三時間ほど離れた田舎町の二階家で、斎場ではなく自宅で執り行われた葬儀には佐山の他に、園田と木之下も申し合わせて参列した。

一人息子の不条理で突然の死に、佐山の親よりも若いはずの本村の両親は憔悴しきって老けて見えた。その横で気丈そうに頭を下げる女性に、佐山はそつと声をかけた。

「本村君のお姉さんですね？」

肯いた女性を棺を安置してある座敷から連れ出し、この度とは頭を下げる。

「お姉さん、本村君が亡くなった理由を警察からお聞きになりましたか？」

「ゲームをやりすぎたとか、信じられないです。あの子、ゲームなんか興味なかったのに」

納得いかないと言うように頭を横に振る本村の姉に、佐山は自分の知っていることを話した。

「ミホちゃんを？ 幻でも見たんでしょうか」

「それを確かめるために、僕もそのミホさん……に似た人物を探してみたいんです。写真があつたら見せていただけないでしょうか？ 厚かましいお願いで恐縮なのですが」

さすがに自分が リアルワールド の社員であることは言えなかった。

「それならあつたはずです」

ちよつと待つてと、本村の姉は二階に上がっていった。すぐに戻ってきたのは、佐山が遊びにいったことのある本村の部屋と同じで、彼が使っていた部屋は整理が行き届いていてアルバムも探しやすかったからだろう。

「これです。うちにあっても、もう見る人もいない写真です。お持ちください」

「ありがとうございます」

差し出された写真には、セーラー服の少女がピースサインで写っていた。肩までの髪に泣きぼくろ。撮ったのは恐らく本村だったのだろう。実にいい笑顔だった。

佐山は写真を喪服の内ポケットに丁寧に住舞った。

本村も彼女の後を追ったようなものだ。何年も遅れてしまったけれど。

読経の中、泣きたいのになぜか涙は出なかった。

Real 3

昼も仕事で夢を見て、夜は夜で夢を見る。 リアルワールドと
いう名の夢を。

そのかわり、佐山は本当の夢を見ることはなくなった。 気絶する
ように眠りにつき、目覚ましのベルで起こされる。

本村が死んで二か月が経った。 泣きぼくろの少女はまだ見つ
からない。

年末間近になって集まった人数は四人と、本村を除いても夏より
減っていた。 雪になりきれない雨が店の外をじくじくと濡らしてい
る。

「お前、妙に律義なところがあるからなあ。 同期でデータ管理に行
ってるやつとかいないのか？」

一時間遅れてきた園田は、どこか疲れた顔で鍋をつつく。

「うちもだけど、プライバシーマークとってるとこも多いし、IT
業界はそういうのは厳しいんだよ。 ユーザーの個人データだけじゃ
なくてログも個人情報にあたるから、社員とはいえ部外者は立ち入
れない部署だし、コピーするのはたとえ親の頼みでも無理って言わ
れたよ。 ましてや同期程度じゃね。 結局何もできないんだよな、俺」
酔いのせいか、いらなことがつい口に出た。

「本村くんが死んだのは、佐山くんの責任じゃないでしょ」

「そうよ。 できるだけのことはやったんだし、もういいんじゃない
？」

木之下と牛島の二人が交互に慰める。

「でも、本村は最後に……」

佐山はポケットの中の携帯を握りしめた。

「見つけた。 やっぱり彼女だ」

そのメールは今も消せずにメモリの中に残っていた。

「あらあ、珍しい人がいる」

出勤前の会社近くのコーヒー店で声をかけられた。十一時の店内は客も少ない。

「あ、山部さん。お久しぶりです」

「ここ、いい？」

トレイを持った山部に聞かれて、佐山は頷いた。

十歳以上離れているであろう山部には、他の若い派遣社員のように佐山を異性として意識しているようなぎこちなさはない。気軽に話せる近所のおばさんのような雰囲気があった。コートを椅子にかけて、山部は遠慮なく佐山の向かいの席に座った。

「十二時からのシフト？」

「ええ。山部さんも？」

「そうなのよ。これから戦の前の腹ごしらえ」

山部のトレーにはサンドイッチとカフェオレが載っている。

「どう？ 管理課は」

「うーん。結構大変なんですけど、傍目には寝てるようにしか見えませんね」

「やっぱり」

山部は笑った。

サポセンと現在佐山がいる管理課はフロアが違うので、派遣社員の山部にはよくわからないことも多いのだろう。いろいろ質問をしてくる。

「あそこは二十四時間体制でしょう？ シフトはどんな感じになってるの？」

「タイムリミットもあるので、実際 ワールド の中に入っているのは六時間ですね。あとは引き継ぎとか報告とか、そんなんでも潰れます」

「ワールド 内には誰かいなきゃいけないから、みんな一斉に入れ替わるわけじゃないんでしょう？」

「そうですね。三時間ごとにシフトは区切つてあるから、半数ずつ交代していくつて感じです」

「じゃあ、夜中の勤務とかあるわけ？」

「ありますよ。二週間交代で三時間ずつずれていくんです」

運営管理部管理課はサポートで上がってきたクレーム処理が的確になされているか管理する部署で、リアルワールド 中の業務がメインになる。その業務内容から部内では『現業』と呼ばれていた。

「そっちのほうはどうなんですか？ 変な質問は相変わらずですか？」

佐山が逆に質問する。まとめたレポートなら読んでいるが、部署が違つたために細かいデータまでは見るできない。

「ホームページのFAQで明確な否定文載せてから少なくともはなつたんだけど、相変わらず来るのよ。FAQ読まないバカなユーザーから」

「そつというのは秋山課長に回してるんですか？」

佐山は何度かエレベーターで挨拶したことのある、秋山のことを思い出していた。まだ若い切れ者という噂がある人間らしく、鞘に入つた目に見えない日本刀を笑顔と一緒にぶら下げているような雰囲気があつた。

「ううん。今はオペレーターが普通に対応してるつていうか、否定してる」

「そうですねえ」

あははと二人は声をあげて笑つた。

「でもね、ネットサーフィンが趣味の友だちに聞いたんだけど、メンタルヘルス系とか自殺系のサイトにはやたらあの手の書き込み多いみたい。質問つて形だね。あんたの会社大丈夫つて聞かれたけど、お前の頭こそ大丈夫かと言いたかつたわ」

とほほと言わんばかりの表情で、山部はサンドイッチにかじりついていた。

家に帰って調べてみると、その手のサイトの掲示板には必ずといっていいほど「死んだ後、リアルワールドで生きられるのか？」という質問が投稿されていた。反応はといえば、「バカバカしい」から「それが本当ならいいのに」「信じれば叶う」といったものでさまざまではあるが、結論らしきものはない。

今度は『リアルワールド』『自殺』のキーワードでインターネット全体を検索してみる。すると、今度は心霊系サイトが大量にひっかかってきた。

内容は夏に佐山が聞いたのと同じ、「自殺した人間を リアルワールド 内で見た」「リアルワールド には幽霊がいる」というものだった。

多数の書き込みを見ていて、佐山はふと違和感を感じた。心霊系のほうは噂話と目撃情報が主で、書きこんでいる人間もばらばらなのに対し、メンタルヘルス・自殺系は質問者のHNやちよつとした言い回しや語尾は違うものの内容はほぼ同じなのだ。

直観した。これはロボットだ。

自動的に書き込みを生成するロボット・プログラムを使って、誰かが故意にそういう噂を流している。そして、複数の「幽霊」が実際に目撃されているらしい。

誰が？ 何のために？

園田に相談してみようかとも思ったが、そう言われても何も答えられない現状では話にならない。

タイトルだけ書いた園田宛ての携帯メールは消すことにした。

本村も自分宛てのメールを出さなかったことがあるのだろうか、こんな風に。

佐山はそんなことを考えながら、「作成中のメールを破棄する」を選択して決定ボタンを押した。

座標やマップがあっても、思考は視覚的な情報に惑わされる。

泣きぼくろの少女を探してあちこちをさまよったおかげで、佐山はリアルワールドの中については同じ部署内では誰にも負けな
いほど詳しくなっていた。おかげで作業時間は予定よりも早く終わ
る。

その余ったちよつとした時間を使って、佐山は情報収集するよう
になった。ユーザーもスタッフ相手ならば気軽に話してくれること
も多い。

とはいえ、「幽霊」に関するユーザーからの生の情報はなかなか
得られなかった。

いくつかの心霊系掲示板を定期的にチェックしても、「幽霊」の
出現情報はせいぜい一か月に一、二件。ビジターとレジデントを合
わせたリアルワールドのユーザーは五〇〇万人を突破している。
実際の目撃者を捕まえるには自分の方法が効率が悪いということ
は、佐山にもよくわかっていた。しかし、業務と関係ないことなの
で、表だって動くわけにもいかない。

地道にやるしかないということが分かっていても、焦燥感は疲労
となって佐山を蝕んでいった。

「よう、まだ働く気か？」

帰ったはずの佐山が戻ってきたのに気づいたチーフの野間は笑っ
た。

擦りガラス風プラスチックのパーテーションの向こうは暗く、等
間隔にモニターだけがぼんやり光っているのが見える。そこでは同
僚たちがリアルワールドにアクセスしているのだ。

「忘れ物、ありませんでしたか？」

「忘れ物？ 何？」

何台も並んだモニターの後ろから野間が出てきた。親分肌で気さ
くな野間は後輩たちの面倒もよく見るので慕われていた。

そのため、シフトがばらばらな管理課を実質まとめているのは、
プログラマー出身の神経質そうな課長ではなくチーフの野間といえ
た。

「緑色のシステム手帳、見ませんでしたか？」

「あ、ああ？ あれ、佐山のなのか？」

ひどく驚いた様子で言う。

「ええ、僕のなんです」

「しまったなあ。あれ、サポセンに持っていていっちゃったよ。秋山んのだと思つて」

「え？」

怪訝な顔をする佐山に野間は言った。

「だって秋山の妹の写真が入ってたから、てっきり秋山のかと思つたんだよ」

今度は佐山が驚かされる番だった。

まもなくして、手帳を持って帰つてきた野間は微妙な顔をしていった。

「秋山いたよ。さつきはいなかったんだけどさ。ごめん。手帳の中身、見られちゃったみたいだ」

これで勘弁してくれと、野間は温かい缶コーヒーを佐山に渡す。

「ところで、なんで秋山の妹の写真を持ってたんだ？」

モニターの向こうに引つ込だ野間は、立ったまま自分の缶を開ける。炭酸独特のプシュツという音がした。

「僕も誰だか知らなかったんですよ」

少し迷つて缶を開けた。

「あの写真、この間事故で死んだ友だちが持ってたんです。リアルワールド の中であの女の子を探しているって言つてたから、見かけたら友だちが死んだことを伝えようと思つて」

甘いコーヒーは少しだけ嘘の味がした。

「見かけたつていつの話だ？ だいぶ前のことだろう？」

「いえ。今年になつてからです。夏くらいだったかな」

「それは妙な話だなあ」

「妙つて？」

「彼女は亡くなつてるんだ。確か五、六年も前だぜ？」

モニターを覗き込んだ野間の顔が、モニターの明るさで下から照らされている。

「またまた。野間さん、冗談はやめてくださいよー」

「いや、それがマジなんだよ。秋山と俺って実は同期なんだけど、バージョン3から4に変わるとき、データとりのために社員の家族の協力も募ったわけ。そんなときに秋山の妹も参加したんだけど、それから割とすぐ後に亡くなったって聞いたなあ」

「事故、とかですか？」

うーん、これ言っているのかなあ、と渋りながらも「自殺だったらしい」と野間は教えてくれた。絶対誰にも言わないよ、を付け加えて。

「そういうわけで、彼女のデータが残ってるわけないんだよ。ユーザーが亡くなる＝退会＝データ削除ってことなんだからさ」

「でも、最近ネットで変な噂が立ってるじゃないですか。リアルワールドの中で死んだはずの人間に会った、みたいな」

あれか、と野間は渋面を作った。

「なんか変な噂が流れてるよな。もちろん、そんなことあるわけないんだけど、上のほうも困ってるみたいだよ。ここだけの話だけど、ユーザー死亡による退会というケースがここ半年ばかり増えてきてるらしい。しかも、入会して二、三ヶ月後の若年者が多いらしい。死因まではわからないが、恐らく自殺だろうな。リアルワールドの中に自分のバックアップを作ったからって、安心してこっち側の自分を消去してるみたいだって、登録管理の連中がウツになってたよ」

これも他のやつには絶対話すなよ、と野間は念を押して仕事に戻った。

それを期に佐山も退出したが、冷たくなってしまったコーヒーは何となく気持ちが悪くて、給湯室で流して捨てた。

Real 4

少女の姿を リアルワールド の中で初めて見たのは、それからしばらく経ってからのことだった。

普通のユーザーならば、現実では叶えられない夢を リアルワールド の中で実現する。

広い庭で思う存分土いじりをしたり、動物と戯れたり。時間や場所や騒音を気にせず、物を作ったり、音楽を楽しんだり。または、物理的距離を超えて人と交流したり、恋人を作ったり。

そのどれをも望まない佐山は、相変わらず匂いのない街の中をさまよい続けていた。

メインストリートの人混みでログアウト時間になるまで、ぼんやりとあの少女の姿を探し求める。

いつまでやれば気が済むのか、自分にもよくわからなかった。本村のあのメールが消せないうちは続けようと思っていた。

視界の隅にログアウト十分前の表示がちらつき始めた頃、ふいに彼女は現れた。

見覚えのある制服で、目の前の交差点を横切っていく。

目を瞬時に拡大表示すると、あの泣きぼくろがあった。

向こうは気づいているのかいないのかわからない。おそらくは気づいていないだろう。

ログアウトまであと八分。

佐山はやっと獲物を見つけた猟犬の喜びで、追跡を始めた。

メインストリートを東に向かう彼女から目を離さないように、早足で追いかける。信号は変わったばかりですぐには向こうに渡れない。

無理に渡ろうとしても、思う存分スピードを楽しみたいユーザーたちが、実在しない車やバイクに乗ってすごい勢いで突っ込んでくる。それとぶつかってしまっても現実にどうなるわけでもなく、即

ログアウトになるだけだが、やっと見つけた獲物を逃がすわけにはいかない。

やっと信号が変わる。

少女は三十メートルほど先を歩いている。背後から観察すると、ビジターのちゃんこな姿ではなく、ちゃんとしたレジデントのデータだった。

ログアウトまであと五分。

もう時間は残り少ない。佐山はダッシュした。

と、少女はそれに気づいたかのように、ふいに路地に入る。

続いて佐山も路地に飛び込むが、すでに少女の姿はない。遠ざかる足音だけがどこからか響いてくる。

「どこに行った？」

ログアウトまであと三分。

ゴミのない妙に清潔な裏路地はどれも似たり寄ったりで、行きつ戻りつしているうちに自分はどこににいるのかわからなくなる。

マップを確認しようとしたときに、目前に赤く大きなログアウトの文字が表示された。

「ちくしょう！」

ベッドから起きあがった佐山はヘッドセットをむしり取ると、壁に投げつけた。大きな音がしてヘッドセットは壊れたが、どうしても現実だと思えなかった。

それ以来、ログアウトの間近になると、少女はあざ笑うように佐山の前に現れる。

目の前を横切る。ふと見上げたビルの階上からこちらを眺めている。路地の奥の暗がり消えていく。

追いかけて、しばらくすると強制ログアウトのサインとともに現実に戻される。

何度も何度も、ループのように繰り返される追いかけて続けるうちに、佐山は少女を夢にまで見るようになった。

いつも目の前でいなくなる。足音だけがどこからか聞こえてくる。

そんな夢を見て、疲れ果てて目覚めると、これが現実なのか夢なのか リアルワールド なのかわからなくなる。

不思議の国のアリスの白ウサギのように、現れては消える死んだはずの少女の悪夢を追いかけているうちに、佐山の現実感覚はどんどん希薄になっていった。

そして、強制ログアウトシステムさえなかったら、と思い詰めるようになっていく。何を使えばいいかはわかっていた。

リミット・ブレーカー。

どうすれば手に入られるか、既に佐山は知っていた。他のツールも。

わずかに残った理性が止めると主張するのを、一度だけという、相手もない約束でねじ伏せる。

ホームページに表示されていた口座に金を振り込むと、ダウンロードのサイトアドレスとパスワードを知らせるメールが届いた。

休みの前日を選んだのは、仕事だけが今の佐山を現実と繋いでいることをよくわかっていいるからだだった。他には何もない。

ログインしてもしばらくは接触してこないことはわかっているが、どこから見られているかもわからない。結局、いつもの通り、メインストリートを中心にぶらつくことになる。

仕事か、少女を捜すためか、そのどちらかでしか リアルワールド に来ることのなかった佐山は初めて、普通のユーザーたちのように暇つぶしのためだけにそぞろ歩くことを楽しんだ。

約五時間五十分後、目覚めのあるシルエットが視界の端をかすめた。

今までさんざんもてあそばれてきた結果、彼女の行動パターンは知りつくしたと言える。必要なのは追跡する時間だけだったのだ。

恒例の追いかけつこのあと、今回も寸止めで逃げられた、という振りをする。もし彼女がこちら側を感知するためのツールを使っているのなら、仕込まれたはずのプログラムはすべて無効化してあるはずだった。

ログアウト予定時間を経過して、姿の見えなくなった佐山に気づいた少女は明らかに油断していた。その彼女を追うのは、違法プログラムを使って透明化と無音化を施していた佐山にとってはたやすいことだった。

リアルワールド における空間の概念は、現実のものとはもちろん違う。

ドアの向こうが座標として連続しているとも限らないし、ドアの内側がその建物の設計図に見合った大きさをしているとは限らない。圧縮してしまえば、あるいは別の座標につなげてしまえば、いくらでもオブジェクトは詰め込めるのである。

少女が入っていたビルの一室も、一見普通に見えた。しかし、踏み込んでみるとそこは見た目よりもずいぶん広い、圧縮されたほの暗い空間だった。

そこには目を閉じ、あるいは開き、立ったまま静かに並んでいるマネキンの群があった。

いや、人形ではない。人間の、ユーザーのデータだ。

普通はユーザーがログインするとユーザのパソコンから読みとられたデータを元に形成され、ログアウトすると同時にこの世界から消えてしまうはずのユーザーのデータが、なぜ実在しているのか、佐山には理解できなかった。

「死者の家によっこそ」

背後から初めて聞く少女の声がする。

「なんなんだ、これは？ 死者の家って？」

「こいつらみんな、死体なんだよ。本人は現実ではもう死んでるの。でもこうやってデータが残ってれば、自分はこっちでは生きていられると思ってるの。バカだよねえ」

くすくすと笑いながら、死者の陰から少女が顔を出した。その彼女も死者なのを佐山は知っている。そしてその身にまとう日本刀のようなざらりとした空気も知っている。その時はその剣呑さは隠されたはいたものの。

「そういうあんたの本体ももう死んでるんじゃないか。中身は違ってるわけだね。なんでこんなことするんだ？ 秋山課長」

「死にたいやつは死ねばいいんだ。無理して生きている必要はない。そうだろう？」

少女の口から聞き覚えのある男の声がした。

「こんなことで安心して死ねるなら、いくらでも死にたいやつは死ねばいいのさ。現実を見据えて生きない人間は、既に死んでいるのと同じなんだよ」

「だからって、死にたい人間が現実で死にやすくするためにこんなことをやってるのか？ そんなことしたって死なないやつは死なないじゃないか」

「人間は簡単に死ぬもんだよ。妹もそうだった。死にたいって言うのを必死で止めて、仕事があっても朝まで話を聞いて。俺は本当に妹を可愛がっていたし、好きだったよ」

その妹の姿で秋山が言う。反吐がでそうだった。

「だけど、妹が死んで俺は思い知ったね。両親にとっては妹がすべてだったのさ。毎晩泣かれて何もできなかった。俺が生きていることなんか、あいつらには何の意味のないことだったんだよ。代わりに俺が死ねばよかったのか？ 何度もそう思った。だから妹を恨むことにしたんだ。死にたがってるやつもね」

「とんだお子さまだな。こんなことをして楽しいのか？」

「楽しいよ」

「誰もがみんな死にたがってるわけじゃないよ。本村だって死にたくなかなかつたはずだ。なのにその姿にだまされて、殺されたんじゃないのか」

「君の友だちは死にたかつたんだよ。俺の妹が死んでから、ずっと死にたかった。だから死者に惹かれて、追いかけて、死んだんだろう？ そうじゃないのか」

「もついいよ。戯言は。俺は現実に戻って、このことを会社に報告する」

「リミット・ブレイカーで捨てた現実には舞い戻るといえるのか。バカだなお前は。とっくにお前の現実なんてなくなってるっていうのに、周りを見てみる。もう戻る道なんてない」

いつの間にか入ってきたはずの出口がなくなっていた。

「命が尽きるまで、ここに居るがいい」

秋山の声が響く中、闇が深くなっていた。

気がつくのと、携帯電話が震えていた。ぼんやりしたまま出ると、

「佐山、お前、いつまで無断欠勤するつもりだ！」

という野間の怒号が完全に現実へと引き戻してくれた。

長く動かさなかったせいで麻痺したように回らない口で必死に説明すると、野間の声がだんだん真剣になってきた。

「とりあえず、お前は今日病院に行つてこい。後は俺がなんとかするから」

という野間に任せて、佐山は病院に行った。点滴で元気になったところで会社に連絡をいれると、秋山が自宅のマンションで遺体で見されたという。もう一週間も来ていなかったそうだ。

結局、不正アクセス、データ偽造の罪で、秋山は被疑者死亡のまま書類送検されることになったが、自殺教唆に関しては立証できず、新聞にも数行しか載らないような地味な事件として処理された。

佐山といえば、始末書と多少のお咎めはあったものの、以前の生活に戻った。仕事もなんとか続けている。

あの死者の家で見かけたユーザーたちのように、生きているのに死んだ目をした人間を見かけることがある。現実でも リアルワールド の中でも。

「現実を見据えて生きない人間は、既に死んでいるのと同じなんだよ」

秋山の言葉がよみがえる。

そのたびに、佐山は自分に問いかける。

俺は本当に生きているのだろうか。

しかし、それを問いつける限り、自分は生きているのだとも思うのだ。

《了》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2513f/>

リアルライフ

2010年10月8日15時49分発行